

「ひとのときを、想う。」をテーマに、JTフォーラム（下野新聞社主催、日本ペンクラブなど後援、JT協賛）が6月6日、宇都宮市のホテル東日本宇都宮で開かれました。ゲストは、作家・タレントで日本ペンクラブ会員の志茂田景樹さんと、脚本家のジェームス三木さんです。志茂田さんは、「くつろぎが常住できる心の保ち方」と題し、幼少期に抱いた劣等感に触れ、心に垣根や敷居をつくらないことの大切さを訴えました。ジェームスさんは、「ドラマと人生」と題し、ドラマを書く上で心掛けていることや、相手の立場になって考えることの重要性を語りました。ユーモアを交えた二人の講演に、約350人が興味深く聞き入りました。



第一部
ゲスト



しもだ かげき
志茂田 景樹氏 (作家・タレント/日本ペンクラブ会員)
演題：くつろぎが常住できる心の保ち方

1940年静岡県生まれ。「やっとな探偵」で小説現代新人賞を受賞しデビュー。80年に『黄色い牙』で榎本賞受賞。その後もヒット作を輩出。また、今年3月には『キリンがくる日』で第19回日本絵本賞読者賞を受賞。最近はボランティア・グループ「よい子に読み聞かせ隊」の隊長としても活躍。

心の中に垣根をつくるな

僕には姉が二人います。子どものころ、歌謡番組が全盛だったこともあり、僕がラジオを聴きながら軽く口ずさんでいると、姉たちは決まって「お前は音痴だから」と笑って言い放ちました。その言葉は、5歳の子どもの心を深く傷付けました。小学校に入って音楽の時間があると、学校に行くのが憂鬱になりました。歌のテストでは、一人ずつ前に呼ばれて歌われます。僕は音痴だという引け目があるので、蚊の鳴くような小さな声で歌っていたのですが、クラス中が「あいつ、すごい音痴だな」という顔で僕を見ていました。歌が終わって自分の席に戻るまでの道のりの辛さを、どうか皆さん考えてみてください。それが心の中に住み続けると、負い目や劣等感になり、本人自身が育ててしまうのです。

高校や大学では音楽の授業が無かったので、暗雲が晴れた気がしました。しかし社会人になると、またしても天敵が現れました。カラオケです。

●自分が引いた線ならまたげばいい

ある会社の営業部に勤めていた僕は、取引先の接待のた

め上司と一緒に食事会にいきました。案の定、二次会はカラオケをすることになりました。当然僕は、歌うことはまっぴらごめんという心境だったので、順番が来ても断り続けました。すると、だんだん上司が苦い顔になり、次の日にはこっぴどく叱られました。それから何日かして、また違う会社の接待がありました。上司から言われている手前、自分の番になったら歌わざるを得ません。仕方なくステージに行き歌い出すと、知らない客まで「あいつは何なんだ？」という鋭い視線を向けてきました。それでますます蚊の鳴くような声になりました。三度目の接待のときは、上司はもう、僕に歌わせるつもりはありませんでした。ところが僕は、自分から「歌います」と言ったのです。なぜなら前夜、僕は心に区切りを付けていたからです。

僕は心という床に不要な線を引いていました。その線のこっちは音痴の領域。向こう側は音痴でない領域。5歳のころから「音痴だ、音痴だ」と言われて、すっかりその呪縛に掛かり、自分自身もどうしようもない音痴だと思い込んでいました。でも、もう一人の自分が言うのです。「それはただの線だ。自分が引いた線なのだから、思い切ってまたげばいいじゃないか」と。それで目からうろこが落ち

ような気持ちになったのです。「そうか！ 歌は歌いたいように歌えばいいんだ」と。こうして自分の心に、区切りを付けたのです。

●くつろぎが人生を豊かにする

僕が歌い出すと、最初は「何だ？」という顔をしていた客たちも途中から驚きに変わり、半分あっけにとられながらも、歌い終わるとお義理でない拍手が起きました。そのときからです。マイクを本当に楽しく握るようになったのは。しかしこれは、自分自身が心に引いていた線を消したに過ぎません。つまり僕が言いたいのは、「自分の心の中に垣根をつくるな。敷居をつくるな」ということです。常に、心にくつろぎを持たせようとする意識が働いていれば、心はちゃんとくつろぎを受け入れるのではないかと思います。それが、その人の生き方を窮屈ではなく、豊かでしなやかで、寛容に富んだものにするのではないのでしょうか。きょう、ここにお集まりの方々の心に、くつろぎが常住することを強く祈って…。いや、強く確信して講演を終らせていただきます。